

■学校経営のポイント

無意識を意識する

喜名 朝博

保護者から「うちの子が友達からいじめられている」という訴えがあった。あなたは担任としてどう対応しますか。教員採用選考の面接練習で、学生にこんな質問をしてみた。「管理職に報告し、学年主任に相談しながら適切に対応する」「本人や子どもたちからよく話を聞き、事実関係を明らかにする」といった回答が多い。だが、やりとりをしていくと保護者からの情報をそのまま受け止めて判断していることが見えてきた。これが未経験者の思考の限界なのだが、危うく誤学習させるところだった。

プライミング効果

最初に得た情報が、無意識のうちにその後の判断や行動に影響を与えることを「プライミング効果」という。保護者からの訴えという状況によって、それはさらに強化される。「いじめられている」という最初の情報が思考の枠組みを形成し、それを前提として他の情報をその枠組みの中で解釈しようとする。いじめられていると訴える子どもが、逆にいじめる側にいるという例もあるが、事情の分からない保護者は、我が子の言うことをそのまま信用しようとする。それによって被害者意識が強くなり、教師もその声に引きずられてしまうことがある。

事実関係の確認は、生徒指導の常套手段だ。しかし、無意識のうちに加害・被害を限定して見たり、保護者の訴えを基にストーリーを組み立てたりしていないだろうか。客観的に事実関係を確認するためには、自分の無意識の思考を意識することが必要だ。そのためにも、事象を俯瞰してみるだけでなく、自らの思考や判断の過程も俯瞰して見ること、いわゆるメタ認知することがポイントとなる。さらに、複数で対応することで、自身の思い込みに気付くことができる。

アンコンシャスバイアス

そもそも人には無意識の思い込みがある。「アンコンシャスバイアス」といわれるこの認知のゆがみは、置かれた環境や過去の経験や知識、価値観、信念などを基に物事を理解し、判断するものであるため、無意識のうちに言動として現れてしまう。パワハラやセクハラなど、様々なハラスメントの根底には、このアンコンシャスバイアスが存在する。無意識の差別や固定観念、不適切な思い込み、時代と逆行するような思考は、問題化されて初めて気付くことになるが、それを信念だと勘違いして改善を怠ると問題はさらに悪化する。

夏休み明け、新たな気持ちで子どもたちと接していくためにも、自身のアンコンシャスバイアスへの理解を深めたい。子どもたちへの偏見や思い込みはないか、無意識の差別をしていないかという視点で省察し、無意識の言動の中の危うさに気付くようにしていくことが大切だ。自身の思考を振り返る力こそ、教師の資質であり、教師の成長の伸び代である。

「～でなければならない」という思考をやめよう

時代遅れの校則に代表されるように、学校の「～でなければならない」という思考には、何の根拠もないだけでなく、子どもたちの人権を否定し、豊かな発想を阻害するものもある。これまで無意識の中で行われてきた学校の様々な教育活動についても、改めてその意義や価値を検討すべきである。「学校の当たり前を見直す」と言われて久しいが、コロナ禍というチャンスを経ても、既に回帰が始まっている。そこには、これまでの教育こそが正しいのだという無意識の思い込みがあるのではないだろうか。学校改善はそれを意識することから始まる。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●いじめ重大事態調査委員長経験 44 件の臨床家が出した結論 《最新刊！》

いじめ・不登校 「先生、その対応間違ってます！」

保護者とつくる“こどもまんが”の学校9つの秘訣

嶋崎政男【著】 四六判／定価 2,310 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> をご利用ください。

